

- II-5 ヒアルロン酸合成阻害剤・4-メチルウンベリフェロンの培養中皮腫細胞への効果
 ○根岸美香^{1,2} 須藤晋一郎^{1,2} 長瀬勇人³
 吉田枝里³ 多田羅洋太^{1,2} 石岡陽菜²
 工藤大輔³ 袴田健一³ 遠藤正彦¹
 (¹弘前大・院医・糖鎖医化学 ²弘前大・院医・附属高度先進医学研究センター・糖鎖工学 ³弘前大・院医・消化器外科学)

- II-6 ヒト膵癌細胞を用いた 4-methylumbelliferone の抗腫瘍効果の研究
 ○長瀬勇人^{1) 2)} 工藤大輔¹⁾ 吉田枝里^{1) 2)}
 根岸美香²⁾ 須藤晋一郎²⁾ 遠藤正彦²⁾
 袴田健一¹⁾
 (弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座¹⁾
 弘前大学大学院医学研究科糖鎖医科学講座²⁾)

- II-7 細胞外マトリクス制御による抗腫瘍効果の検討
 ○吉田枝里^{1) 2)} 工藤大輔¹⁾ 長瀬勇人^{1) 2)}
 須藤晋一郎²⁾ 根岸美香²⁾ 遠藤正彦²⁾ 袴田健一¹⁾
 1)弘前大学医学研究科消化器外科学講座
 2)弘前大学医学研究科糖鎖医化学講座

- III-8 緊急入院を要した成人先天性心疾患患者の臨床像
 ○大谷勝記¹ 嶋田淳¹ 三浦文武¹ 山本洋平¹
 高橋徹¹ 伊藤悦朗¹ 米坂勲²
 (弘前大・院医・小児科学¹ 同・院保健・障害保健学²⁾)

【緒言】近年、成人先天性心疾患(ACHD)患者数は飛躍的に増加しているが、ACHD診療体制の確立している一部の施設を除き、その多くは小児科医が中心に管理している。【目的】緊急入院を要したACHD症例をまとめ、ACHD診療の問題点を検討する。【方法】2008～2014年に緊急入院を要した18歳以上の12名(男8、女4、18～38歳)、のべ34件について後方的に検討。【結果】心疾患はチアノーゼ性心疾患10名、非チアノーゼ性心疾患2名。在院日数2～428日、8名で2～8回の複数回入院を要した。入院理由は不整脈、心不全、感染性心内膜炎、急性腎不全、消化管出血、肺膿瘍、肺梗塞、褐色細胞腫など。心臓手術(心臓血管外科)、緊急内視鏡検査(消化器内科)、緊急冠動脈造影(循環器内科)、血糖管理(糖尿病内科)、持続血液透析(ICU)、Fontan術後妊娠出産(産婦人科)、心因反応(精神科)など、各科との協力診療を要した。入院死亡は3名。【考察】緊急入院の理由は心不全、不整脈、チアノーゼに起因する合併症、感染症が主で、そこに生活習慣病、妊娠出産、精神的問題など成人特有の問題が加わり、複数診療科による総合的な診療を要した。小児科病棟では成人患者の受け入れに病室環境や看護体制で難渋した。【結語】ACHD診療体制確立には小児科、循環器内科・外科のみならず病院全体での理解と協力体制が不可欠である。